

BOOKS

『福翁自伝』 福沢諭吉著

及川 わたる

福沢諭吉は、「天は人の上に人を造らず……」で始まる『学問のすゝめ』などを著した、明治期の代表的な啓蒙思想家である。『福翁自伝』は、その福沢が自らの生涯を語ったもので、自伝文学の傑作と評価されドイツ語や英語に翻訳され海外でも読まれている。

その内容は、中津(現大分県中津市)での幼少時代から、長崎や大阪での書生生活、その後江戸での生活や徳川幕府の軍艦咸臨丸での米国行を初めてする三度に及ぶ洋行での体験などを通して、いかに自由・平等といった人権思想を身につけていったかという、日本の激動期を生きた一人の知識人の生涯のすべてが描かれている。本書の面白さは、著者が幕末・明治期という激動した時代を生きたとしたことだけではなく、明治政府にたいする認識の誤りやヨーロッパの政治制度や社会制度の理解に苦労したこと、さらに酔って料理屋から食器を勝手に持ち出したことまですべてを正直に、福沢独特の非常にテンポの良い文章で書かれていることにある。

私は、この本を2年の時に初めて読んで以来、何度か読み直している。本書を読んで感銘を受けたことは、福沢の人権思想もさることながら、それを書物に著すだけでなく、自分自身の行為のなかに反映させたことである。実際に福沢は、明治維新後に士族の身分を捨てて平民となり、家庭内においても家族に対して「さん」づけで呼んでいる。福沢は、人権思想が広まり個人の行動に影響を与えることが真の近代化であると考えた。

福沢が本書を著してから約一世紀が経とうとしている。各個人が普遍的な規範に基づいた行動を要求する福沢の思想は、今日においてもその意義は失われるどころか、益々重要なものになっていると思われる。

(法学部4年)

(岩波文庫 1978年、「福沢諭吉選集」第10巻 1981年などに収録されている。)

『ラ・ヴィータ』

高泉淳子著

谷中 恒夫

戯曲というものはどうしても小説などとも形式が違い、読みにくいといわれるしそう思

うが、行間から舞台を思い浮かべる、それがいいのだと思いきななのでその中から一冊。

ふとした瞬間に、生・死を考えたりしたとき、たまたま出会った本である。何時も情性でまわりに流されているだけと思ったときに違うかもしれないと思えるきっかけを作ってくれたように思う。

ひとりひとりの人生では、その誰もが主人公であると、誰かは歌っていた。そう思い続けるのは大変な事だし、常に主人公であると思っていくのは難しいが、これならいえると思う。人は自分の一生の間に、少なくとも2度は物語の主演になるという。生まれる時と死ぬ時。誕生のときの赤ん坊が、自分が主演であるという意識を持たないのは、仕方がない。だから、死ぬ時位、自分が主演を演じているという意識を持ちながら死にたい。それなのに、やっぱり意識を持つことは難しい。だからこそ、ひとりの男が「今がすべてだ、今がね……。」と語り、『死のステージ』をしめくくる。そして人生を受け入れる。

ともすれば非常に重くなりがちで、読むのが辛くなってしまうような内容でもあるが、いたるところに笑いが盛り込まれ、それでいてしんみりとさせてくれる。何とはなしに考え事をするのにはいいかとも思う。

著者の高泉淳子とか、これを上演した遊●機械／全自動シアターといっても札幌での知名度低いのが寂しいのだが、UHBのボンキッキーズで山田のぼる少年をしていた人が、高泉淳子といえは分かる人もいるような気がする。一部の巷では、ランドセルのもっとも似合う女優として脚光を浴びたこともあったが、札幌では過去に一度しか公演しておらず、この劇団が再び札幌で公演してくれる日を今か今かと待つばかりである。

(経済学部2年)

